
天知る地知る。

乾 弘毅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天知る地知る。

【Nコード】

N0129BA

【作者名】

乾 弘毅

【あらすじ】

うちのおばあちゃん普通と違う。なんか不思議能力持つてるくさい。しかも一緒にいるとこっちまで不思議能力身につくっぽい。ちよっと迷惑。でも身内なので偏見はよくない。地に足ついた素朴な考えをモットーに付き合おうと思う。でも勝手に海外逃亡してホームシックでさびしいから大河ドラマのDVD持ってきてとか言ったらダメでしょ。しかも世界地図にものってない国にどうやって行くのさ…。

不定期更新です。

1。別にイイけどなー。(前書き)

あけましておめでとございます。
新しい年なので新しい話始めました。

1. 別にイイけどねー。

うちのおばあちゃん普通と違う。

とは子供心にも思っていた。

だって普通のおばあちゃんは裏の畑を耕しに行くのに、うちのおばあちゃんは山へ滝にうたれに行ったりする。

それに普段から肉も魚も卵もいつさい食べない。

動物性タンパク質で口にするのは市販のコーヒー牛乳に含まれる牛乳くらいじゃないだろうか？

ちなみに盆と正月とあとなんか知らんけど年に2回くらい行われる怪しげな法事の前1週間は私たち家族も動物性タンパク質が禁止されていた。

ありがたいことに私は肉も魚も嫌いな偏食人間なのでまったく不満はなかった。

13歳のときに育ちざかりにもかかわらず育ちそこなっているチビガリの私を心配してか、「卵は食べてイイよ」と言われたことがあったけど。

それって無精卵だから？ねえねえそういうこと？とかすっごく聞いてみたかったけどガマンした。

うちでは暗黙のルールというか掟というか、おばあちゃんのやっていることについて話してはいけない雰囲気があった。

でもどうやらスピリチュアルなカンジは隠せてなかった。

おばあちゃんがなんか唱えてると神棚の蝋燭の炎が尋常じゃないくらい燃え上がるし。

その炎が天井に届きそうだったり、ていうかも届いてるよね、というときも天井焦げたりしないし。

そもそも押し入れよりでかい神棚とか友達の家では見たことないし。滝へうたれに行くおばあちゃんの荷物持ちに行ったときに「占いるね」となにやら唱えながら習字紙みたいなのを円筒形に丸めて蠟燭の火にかざすと、そのままの形で火のついた紙が燃えながら飛んでいったりもしてた。

おばあちゃんの手からつぎつぎと空に飛び立つ炎の幻想的な映像に感動しつつ、おばあちゃん占い師？とか思ってたこともあったっけ。そのうち、なんかたまに頼まれてお祓いとかやってるっぽいことにも気づいた。

おばあちゃん霊能力者？って思ったときにはちょっと引いた。私の勝手なイメージでは、霊能力者というのはいかにもな白装束とかを着てトランス状態に入る姿を全国ネットのテレビクルーに披露するちよつとイタイ人種だった。

しかしうちのおばあちゃんは第一村人としてテレビクルーに目をつけられそうなモンペ風ズボンの愛用者だった。

いつかい滝に打たれるときに「ホントは裸で滝に入りたい」と言っていたことはあったけど、コスプレ願望はなさそうでした。

とりあえず、家族として偏見を持つのはやめよう、と地に足のついた素朴な考えをモットーにおばあちゃんと付き合うことにした。だから山に行くときの荷物持ちも率先してすることにしました。だってシンバルみたいな金属製の道具とか入ってるし、そんな重いもの年寄りに持たせてひとりで山行かせるとか孫失格じゃね？と違って。

でもそしたらだんだん霊能力みたいなのが身につきはじめちゃって…。
不意打ちで変な音とか声とか聞こえたり、意識が飛んだりするよう
なことがあったりするようになった。

それをお父さんにちらっとぼやいたら、一緒に山について行くだけで修行を積んだ形になるんじゃないかと思う、との持論を展開されました。

RPGで全く攻撃しなかったにもかかわらずパーティーに参加してただけで経験値がもらえちゃうのと似たようなカンジ？

なんでもお父さんが小学生のときは私以上にいつもおばあちゃんと一緒だったせいとか、通学路にお化けとか見えて大変だったんだってあんまり怖くてもう小学校に行けないくらいに重症化したので、意を決しておばあちゃんに相談したこともあったらしい。

その頃も触れてはいけけない雰囲気だったけど、だってこれ母ちゃんのせいだよ、と小学生のお父さんは確信していた。

でもしばらくの沈黙のあと、「お化けとかホント存在しないし」とかまるで常識人みたいな返答でごまかされて顎が落ちるかと思ったそう。

おばあちゃんにだけは言われたくないよそれ…。

その発言があまりに衝撃的だったせいとその後どうやって解決したかの記憶がないそうであまり参考にはならなかったけど、顎が落ちるかと思った、のくだりが面白かったので許すことにした。

一緒に行くのがマズイのか、と分かったところでいまさら荷物持ちをしたくないとも言えないし。

でも高校受験のとき夜中に勉強をしていたら後ろに置いたラジオからブツブツガガガガって聞こえたのが超絶的に怖かったので私もおばあちゃんに相談してみた。

お父さんの話を聞いた後だったのでどんな返答をされるのか興味あったし。

そしたら、「ばあちゃんなんて先週の大河ドラマの時間に何年も前に死んだ隣のタバコ屋の婆さんがテレビに入ってきて、息子が勝手に土地を売ろうとしてるからとめてくれてしつこく言うからぜんぜんドラマが見られなかった。すごく楽しみにしてた回だったの。ばあちゃんに言われてもなにもできんよってちゃんと言ったのに帰ってくれなくて迷惑だった」と延々と愚痴られた。

たしかに、おばあちゃんがタバコ屋さんに電話とかしたら怪し過ぎだしなにもできないよね…。

大河ドラマはDVDになったらレンタルしてあげるね、と約束したら嬉しそうだった。

結論としては、小さい頃のお父さんやおばあちゃんにくらべたらたいたことないしガマンするわー、と思っただけだ。

おばあちゃんと一緒にいると、この世の中には確かに科学ではいまだ説明されていない不思議なことがあると思いきらされる。でもそれが非科学かどうかはわからない。

宗教とか心霊とか無理にスピリチュアルな説明をつけようとするから矛盾や誤解が生まれるけど、実は不可視光線や電波と似たようなモノなのかもしれない。

だから、無視することにしようと思った。

考えてもしかたないモノは考えなければイイんじゃないかな、と
思
つて。

おばあちゃんみたいに無視したくてもできないくらい日常生活に不
自由がでたら覚悟を決めて向き合っただほうがイイかもしれないけど、
そうならない限りは全力で無視することに決めました。

でないとワタシ、白装束でトランスしつつテレビ出演しちゃうイタ
い大人にうっかりなっちゃうかもしれないと思つて。

できれば普通に恋愛結婚とかして幸せになりたいと思つていた。

そして地に足の着いた堅実な日常を手に入れたとも思つていた。

いま思うと、懐かしくも生あたたかい気持ちになる。

初海外がプライベートジェットとか考えようによつては豪華じゃね、
とかポジティブに考えるようにしながらも地に足の着かない飛行機
に乗って遠い目をしてしまう成宮ヒトミ18才でした…。

2。青は空の色ではなかった。

それは水の中にいた。

上を見れば青い空。

その青が、空の色ではなく空までの遠い距離の色であることを確認したくて水の中を旋回すれば、ほどなく湖には大渦が生まれ、それはその勢いとともに翔びたつた。

否、翔びたとうとした。

しかし、そうすることは叶わなかった。

それは怒り、水面ぎりぎりから目の前の老婆を責めるように見つめた。

老婆は、湖の端に座り、いたわるように見つめ返した。

「もうすぐ来ますから」

今は老婆の言葉を信じるよりできることはない。

もう一度翔びたい。

あの青を見たい。

飼いならされたような己の現状を壊したい。

そして。

ぞくり、と久しく感じていなかった甘い疼き。
溶けあい、混ざりあうことで生まれる甘い痺れ。
あれを再び味わいたい。

死をひかえた老婆からの最後の贈り物。

…老婆は、孫を呼んだ。

なぜそんなことをしたのか自分でも分からない。

彼女は孫を愛していたし、気に入っていた。

孫の望みがここにないことを知っていた。

だから、一人でここに死にきたはずだったのに。

あの子は、どうするだろうか？

老婆は空を見上げた。

3。3は意志を伝える。

「いったいあの方は何を考えていらっしやるのか…」

「なにを今さら」

「しかし、この大事な時期に余所者を迎えるなどやはり賢明とは思われません」

「死に際を看取って欲しいのやも知れん」

「それは…」

「どのみち、迎へはもう向かっている」

冷淡な表情で話を終えた。

ルキアは美しい少女のような顔立ちのせいで、この国の指導者としても最高権力者としても頼りなく思われていることを知っていた。さらりと肩まで伸ばされた白銀色の髪も、透明な緑色の瞳も、必要以上に紅い唇も、鑑賞するには良いが従うには抵抗があると言われている。

ルキアの美しさは、情報を手に入れる道具としてはしばしば役に立つが、それ以外では今のところ価値がないようだった。

幼い頃から王となるべくたくさんのことを諦め手放してきた。

そのためにも、この度の儀式はなんとしても成功させなくてはならない。

たとえば、不確定要素があっても。

ルキアが見つめる先には、美しい牲贄候補が3人。

湖にはられたまじないを解く祝詞と神に捧げる踊りを練習している。

3は神に意志を表す略式数字。

本来なら100が望ましいとされるが、人口の少ないこの国から美しい牲贄候補を100人も用意することは不可能だった。

それに、どうせ何人用意したところで選ばれるのはたったひとり。

牲贄候補のうち神に選ばれ交わりを持った者は神の子となり、ラキアの妻となる。

そうすることで、神をこの国に繋ぎとめる。

誰が選ばれたとしても、そこに愛はない。

王としての務めがあるだけだ。

まして恋など絵空事にすぎない。

…ばかばかしい。

つまらない戯れ言など忘れるべきだ。

たとえそれが、神の巫女の言葉だったとしても。

ラキアは一度だけ頭を振ると執務室に戻っていった。

4. ヒトミちゃんのスーパースキル

受験勉強を邪魔する、オチなし意味なし地味に打撃な超常現象にも負けず、無事高校生になることができました。あっぱれ。

コタツで眠気に堪えつつ歴史語呂合わせ年号表を唱えてたら向かいの壁にサバンナ（？）見えたりして、まじわけ分からん嫌がらせー、でも無視無視無視、と学力だけでなくスルースキルも身についた受験期間。

この調子なら高校生活も難無く過ごせるだろうとか自信ついたわ。…ふっ。

ただ、心配事が何もないわけではなく…。

それは、おばあちゃんのこと。

いやね、滝に行ったり占いしたりは別にイイと思うんだけどねー。

…そういえば占いのときに唱えてる歌みたいなの、これ何語かなー、って耳を澄ませてたらある日突然右耳の斜め後ろ15センチから自動翻訳されるようになりました。

なんて発音してるのかはいまだに分からないけど、意味だけは分かるというシニール体験。

分かってみたらなんてことない、名前と年と占いたい内容を言うてるだけでした。

例えば、成宮ヒトミ・16歳・健康、で炎をひとつ飛ばす。

最初に依頼されたらしい知らない人たちを占ってから、私たち家族のことを占つらしい。

ひとりにつき、健康、仕事（勉強）、金運、恋愛、の4つは必ず占う。

恋愛で…。

ものすっごい結果が気になったけど、炎を読み取るまではできませんでした。

…ちっ。

なんか糸で引かれるみたいに空に登って燃えカスも煙りもでないのが一番イイみたいっていうくらいは分かったんだけど、自動翻訳のことは訳あつておばあちゃんにも内緒にすることにしてたのでそれ以上は聞けなかつたんだよねー。

自分の恋愛運の炎を真剣に見てたら胡散臭いカンジで見られてたことはあつたけど…。

それはともかく。

問題は、お被い、だと思ふのよ。

おばあちゃん、お被いから帰ってくると尋常じゃなく寝るんだよね。なんかね、すっかり消耗して帰ってくるの。

これ大丈夫なの？いやダメだろ、ってノリツッコミ入れちゃうくらい。

前からこうだったわけじゃないと思ふんだよねー。

やっぱり、年、ですし？

物理的に身体に異常が出たりしないのかな？って心配になる。

それとなく、お被いはもうインじゃないかな？みたいなこと言うてみたりしたことはあつただけだ…。

だって、いくら報酬をもらってるのかは知らないけど、うちの家計はお父さんのお給料とお母さんのパートでまわっている。おばあちゃんが働く必要なんてない。

でも、おばあちゃんに仕事を持ってくるのは、お父さんのお姉ちゃん、つまりおばあちゃんの娘だ。

たぶん、おばさんはそれで生活してるんだと思う。

そのことで、たまにお父さんとおばさんが大ゲンカする。

でもおばさんは懲りない。

それどころか、私のことを物欲しげに見つめてくるようになった。こわ。

そんなわけで、私の不思議スキルについて口にするのは自主規制。

代わり映えのない毎日のなか、この調子で今度は大学受験も乗り切るのだ、と思ってたんだけど。

…突然、おばあちゃんが身体の痛みを訴えはじめた。

…。

末期ガンだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0129ba/>

天知る地知る。

2012年1月6日09時49分発行